

『日本洞上聯燈錄』の研究

(四)

卷第七所収諸伝訓注（その三）

近世洞門研究班

晴山俊英 岩永正晴 塚田博
海老澤早苗 駒ヶ嶺法子

はじめに

本研究は、嶺南秀恕（一六七五～一七五二）が編んだ『日本洞上聯燈錄』（以下『聯燈錄』）を通読し、訓注を試みるものである。

前稿（『駒澤大学禪研究所年報』第十六号所収）までに、卷七所収の川僧慧濟の法嗣石宙永珊まで、計十五師の伝に訓注を附すことができた。本稿ではひきつづき、卷七所収の諸祖師の内、大巖宗梅の法嗣賢常俊から、古山崇永の法嗣松堂高盛までの五師の伝を取り上げた。

の井上は本稿部分に関しては都合により不参加である。
本稿も、参加者全員が分担して原案を作り、全員で検討を加え作成した。また、本研究が、駒澤大学禪研究所の研究班の活動として行われたことも、前回と同じである。

目次

はじめに

目次

訓註凡例

永平下第十世

洞慶院大巖宗梅禪師法嗣

井上亜菜子、駒ヶ嶺法子、岩永正晴の六名である。本稿該当部分の検討から新に海老澤が参加した。但し、当初より参加

15. 16. 駿州眞珠院賢常俊禪師
駿州大祥寺行之正順禪師

17. 駿州智満寺回夫慶文禪師
瑞龍實菴祥參禪師法嗣
18. 奥州頭陀寺栽松青牛禪師
円通古山崇永禪師法嗣
19. 遠州円通松堂高盛禪師

※算用数字を附した七師の伝に訓註を施した。

訓註凡例

- 一、本研究は『日本洞上聯燈錄』（十二卷十三冊、以下「聯燈錄」）の読解を目的とし、訓註を試みるものである。底本には駒澤大学図書館所蔵の寛保二年（一七四二）刊本（駒図一四・三一七）を用いた。その際、いずれも同本を底本とするものではあるが、明治十八年刊行の大内青巒校訂本、及び『曹洞宗全書』「史伝上」所収本を参照した。
- 二、本研究の第四回報告となる本稿では、「永平下第十世」の諸伝を收める卷第七のうち、十五番目に列せられる賢窓常俊より、十九番目に列せられる松堂高盛までの伝に訓註を施した。
- 三、本稿では本文を掲げ、訓讀文を示し、註を記した。但し底本には改行がなくとも、検討の上で適宜に段落を設けた場合もあり、その際には段落毎に本文・訓讀・註記を揚げた。

四、本文は、便宜的に『曹全』の頁・段によってその所在を示し、訓讀に応じて句点を附した。

五、本文は、原則として正字で表記したため、異体字・俗字・書写体と思われるものも断りなく改めた。但し、『聯燈錄』の性格上、対校すべき異本がないため、検討の結果として底本の誤りと思われる文字を改める場合はその旨を註記した。また、『曹全』の誤字はその都度註記した。

六、訓讀文は、原則として常用漢字及び現在通用の文字で表記し、句読点を附した。また、難読と思われるものには振り仮名を振った。なお、底本が有する振り仮名は出来るだけ採用した。

七、訓讀に際しては、底本の訓点を尊重し底本の示す文意の把握につとめる立場をとった。検討の上改めた場合もあるが、その際には変更をその都度註記した。

八、註記は、訓讀文に各序類跋毎に（或いは各段落毎に）註番号を振り、その註番号に従つて施註した。また、註記に他の資料を引用する際には、常用漢字及び現在通用の文字を用いた。

卷第七所収諸伝訓注（その三）

15 賢窓常俊禪師（曹全「史伝上」三七一頁下段）

洞慶大嚴宗梅禪師法嗣

駿州真珠院賢窓常俊禪師。自壯扣諸名宿。至大嚴陶熏。久之機契。初出世總持。遷崇信洞慶。繼于駿之梅谷。創院曰真珠。學侶蠻聚。文明甲辰住越之龍澤。明應癸丑補大洞。文龜辛酉再據席。上堂。乾闥婆王曾奏樂。山河大地皆作舞。真珠今日有條攀條。無條攀例。也要應箇時節。驂拈拄杖云。還有賞音者麼。良久曰。一曲兩曲無人會。雨過野塘秋水深。永正四年丁卯十一月四日謝世。塔本院。

〔訓説〕

洞慶大嚴宗梅禪師法嗣

駿州真珠院賢窓常俊禪師は、壯より諸名宿を扣き、大嚴に至りて陶熏せられ、久しくして機契す。初め總持に出世し、崇信・洞慶に遷る。駿の梅谷に繼いで、院を創て真珠と曰う。學侶蠻聚す。文明甲辰、越の龍澤に住す。明應癸丑、大洞を上堂。〔乾闥婆王曾て樂を奏す。山河大地皆舞を作す。真珠補す。文龜辛酉、再び席に拋る。せんが〕〔かつ〕〔かわか〕〔じょう〕〔ねん〕〔かわか〕〔じょう〕〔ねん〕に応ぜんと要す。」驂に拄杖を拈じて云く。「還つて賞音の

者の有りや。」良久して曰く。「一曲・両曲人の会する無し。雨過ぎて野塘秋水深し。」永正四年丁卯十一月四日世を謝す。本院に塔す。²¹

〔註記〕

(1) 洞慶……洞慶は久住山洞慶院(静岡県静岡市葵区)。大洞院末。もとは真言宗で享徳元年(一四五二)、石叟円柱(一三八九~一四五七)が師如仲天閣を請じて中興。三世大嚴宗梅に至り寺基が定まる。その法嗣に賢窓常俊(四世)、行之正順(五世)、回夫慶文(六世)が出て、以後三名の法燈から交互に輪住を出す。

(2) 大嚴宗梅禪師……大嚴宗梅(?)~一五〇一)。大洞院の如仲天閣に投じて出家。その法嗣石叟円柱の法を嗣ぎ、石叟を継いで洞慶寺三世となる。長禄元年(一四五七)、師席を嗣いで遠江崇信寺三世、文正元年(一四六六)越前龍澤寺輪住、文明一一年(一四七九)能登總持寺二八八世を歴住。文龜二年(一五〇二)六月四日寂。法嗣には賢窓常俊のほかに行之正順・回夫慶文がいる(曹全「大系譜」)。「聯燈錄」六に所収。

(3) 駿州真珠院……駿州は駿河国(現在の静岡県中部)。真珠院は現在の静岡県静岡市清水区梅ヶ谷にある。開山は賢窓常俊。山号は鳳凰山。洞慶院末。

(4) 賢窓常俊禪師……賢窓常俊(?)~一五〇七)は、諸方を歴遊して洞慶院の大嚴宗梅に参じ久しくして機契う。初め總持寺に出世し、退いて洞慶寺・崇信寺を歴住。また駿河国梅谷に真珠院を開く。永正四年(一五〇七)十一月四日寂。賢窓常俊伝は燈史には『聯燈錄』のみに採録され、「禪學大辭典」

の記述も『聯燈錄』に拠っている。

(5) 杜より諸名宿を扣き……杜は壯年で三十歳前後を指す。名宿は年功を積んだ立派な学者。ここでは高僧のことを指す。「扣」は「扣門」「參扣」等の用例があり、師に教えを請う意に用いられる。

(6) 大巖に至りて陶熏せられ……「陶熏」は薰陶の意。賢窓の修行者としての力はたるき（機）が、大巖の縁に契い、認められたこと。機縁が契つたこと。

(7) 初め總持に出世し……本文では、最初に總持寺出世を揚げている。これは大巖に嗣法し、總持寺に瑞世したことを指すと思われる。なお、『曹全』「大系譜」には、明応六年（一四九七）八月五日より同年十一月十一日まで總持寺三七〇世を勤めたとの記載がある。

(8) 崇信・洞慶に遷る……崇信は飯田山崇信寺（静岡県森町）。大洞院末。応永八年（一四〇二）、如仲天闖の開創。開基は飯田城主山内対馬守。洞慶院同様、二世石叟円柱、三世大巖宗梅、四世賢窓常俊と嗣がれる。なお、崇信寺には、応永八年「山内道美寄進状写」が伝わっている。四至が記され、開創時の一次資料として希少なのでここに紹介する。

奉寄進崇信寺山之事

北丑寅之方者谷堺也、谷頭之峰筋堀切有、東者雨落切宇刈江堺也、西者谷を堺也、未申薬師堂山之堺仁堀切有、南者地頭方之山堀切有、道美子々孫々不背此旨、末代為証文如件、

応永八乙正月吉日

進上 崇信寺

侍者御申中沙弥道美（花押）

〔崇信寺文書〕『静岡県史 資料編 6 中世二』静岡県、

一九九二年）

〔真珠院〕（懸紙上書）

（今川義元花押）

するかの国梅かや村之内田町四段新寄進之事

右是者、かしまの明神の神田たりといへとも、数代人給に落来る地也、然ニ当院寂庵性阿いはいを立をく處ニ、大破ニをよふ之間、且者修理のため、かつハ香田之ためニこれを寄附せしむ、但此内参段之分石米壹石八斗之所をハ、かの神領ニ附置、然者即当社を鎮守ニ崇敬せられ、修造つまり等下知を加らるへし、縱郷中地検ありといふとも、かの地ニをひてハこれをのそき、永寄附せしむる所也、仍如件、
天文十八己酉十月四日 長勝院

真珠院

〔真珠院文書〕『静岡県史 資料編 7 中世三』静岡県、

一九九四年）

(9) 駿の梅谷に繼ぎて……賢窓の真珠院の開創は、註(11)の

記述から文明一六年（一四八四）以前のことと思われる。なお、梅ヶ谷の地名は、真珠院文書が初見で、賢窓の開創から六十年以上そのちの天文一八年（一五四九）十月四日「寿桂尼朱印狀」に見える。

(10) 寿桂尼は今川義元の母で、この時、寂庵性阿の位牌所の修理のために、梅ヶ谷の鹿島明神の神田を真珠院に寄進している。真珠院と今川氏の結び付きがうかがえる。寂庵性阿は今川彦五郎（一五一七～三六）。今川氏親の子。母は寿桂尼。学侶蟻聚……「蟻聚」は「蟻集」の意。真珠院の賢窓のものに蟻が群がるように修行僧が集まつたさまを表す。

(11) 文明甲辰、越の龍澤に住す……文明甲辰は文明一六年（一

四八四）。龍澤は梅山聞本開創の越前國龍澤寺（福井県あわら市）。龍澤寺の輪住を勤めた意。龍澤寺は七世以降輪住制が敷かれ、その記録である『龍澤寺前住帳』（龍沢寺所蔵）には、賢窓は文明一六年に三〇世として輪住を勤めたことが記載されている。賢窓の前後の二九世大年祥椿が文明一四年より、三一世の益翁方謙が文明一八年より輪住となつて从此から、一年間の輪住期間であつたと思われる。なお『龍澤寺前住帳』については、『越前龍沢寺史』（越前龍沢寺史刊行会、一九八二年）の記述に拠つた。

(12) 明応癸丑、大洞を補す……明応癸丑は明応二年（一四九三）。大洞は如仲天闖開創の大洞院（静岡県森町）。大洞院の輪住を勤めた意。大洞院は二世以降輪住制が敷かれ、その記録で

ある『大洞禪院住山記』（大洞院所蔵）によると、賢窓は明応二年に輪住を勤めたことが記載されている。また、永正元年（一五〇四）に賢窓が大洞院に再住したことも記載されている。輪住世代については、初期の輪住が不明確であるため不明。なお『大洞禪院住山記』については、広瀬良弘氏「地

方禪林の住持制度に関する一考察——遠江大洞院の輪住制——（曹洞宗研究員研究生研究紀要）第十一号、一九七九年）掲載の『大洞院輪住表（二）』に拠つた。

(13) 文亀辛酉、再び席に拠る……文亀辛酉は文亀元年（一五〇二）。賢窓が大洞院を辞し、真珠院に戻った意か。

(14) 上堂……法堂に上り説法すること。以下は賢窓が真珠院で弟子に対して行った上堂の言葉。以下の上堂は、「五燈会元」卷二十一「薦福悟本禪師」章（続藏一三八冊一七九八上）に、「上堂。乾闢婆王曾奏樂。山河大地皆作舞。爭如跛脚老雲門。解道臘月二十五。博山今日有條攀條。無條攀例。也要應箇時節。躉拈拄杖云。橫按膝上。作撫琴勢云。還有絃賞音者麼。

直饒便作鳳凰鳴。畢竟有誰知指法。卓一下。下座。」とあるのを踏まえた語。

(15) 乾闢婆王……乾闢婆王（gandharva）はヒンドゥー教の神の一つ。インドラ（帝釈天）に仕える奏楽神。神の飲料水である蘇摩酒（ソーマ）を守護する。仏教では乾闢婆と呼ばれ、天竜八部衆（仏法を守護する天や竜等の八部の異類）の一

つ。馬が前進する様子。

(16) 賞音……音楽を鑑賞すること。転じて風流韻事を解することができる者を指す。ここでは、言葉を越えた真理を理解でききるものがあるだろうかの意。

(17) 良久……久しき。しばらくたつて。

(18) (19) 「一曲・両曲人の会する無し。雨過ぎて野塘秋水深し。」：『碧巖錄』第三十七則の頌に、「三界無法。何處求心。白雲為蓋。流泉作琴。一曲両曲無人会。雨過夜塘秋水深。」とあるのを踏まえた語。『聯燈錄』では「夜塘」を「野塘」とする。

(20) 永正四年丁卯……一五〇七年。なお、賢窓寂の二ヶ月ほど前の九月八日に、今川氏親から次の禁制が真珠院に出されている。宛て先は真珠院なので、住持の賢窓を指すと思われる。

〔真珠院 氏親〕（懸紙上書）

於當院甲乙人等濫妨狼藉、禽獸殺生、山林竹木截取等之事、堅以制止焉、若有違犯族者、則可處嚴刑旨如件、

真珠院

(21) 本院に塔す……本院とは真珠院を指すか。そこに墓塔を設けたこと。なお、本章には記されていないが、『曹全』「大系譜」には、賢窓常俊の法嗣として慈山永訓（真珠院二世）・助岑祥佐（崇信寺五世）が掲げられている。

（22） 安本博 若尾俊平編 一九七七年六八六頁参考）

16. 行之正順禪師

〔曹全〕「史伝上」三七一頁下段～三七二頁下段

〔原文〕

駿州大祥寺行之正順禪師。信州櫻井氏子也。夙有靈根。少能割愛。受具後遊方。及到洞慶會中。稍知觸淨遂升堂奧。初於大谷鄉。開梵刹曰大祥。

〔訓読〕

駿州大祥寺行之正順禪師、信州櫻井氏の子なり。夙とに靈根有り。少して能く愛を割き、受具の後遊方す。洞慶の会中に到るに及んで、稍や、^{そくじやく}触淨^{つちじやく}を知り遂に堂奥に升る。初め、大谷の郷に於いて、梵刹を開いて大祥と曰う。

〔註記〕

(1) 駿州大祥寺……大祥寺は、現在の大正寺（静岡市駿河区大谷）のこと。大祥寺（大正寺）について、駿河国の地誌である『駿国雜志』四十九卷七十八冊（阿部正信著、一八一七年成立）の卷之四十七之二「佛閣」に大正寺の項があり次のよ

うに記載されている（『駿河雜志』阿部正信著、中川芳雄安本博 若尾俊平編 一九七七年六八六頁参考）。

（23） 安本博 若尾俊平編 一九七七年六八六頁参考）

〔内割注〕（）内は筆者による訓説。

〔大正寺〕有渡郡大谷村に有り。瑞現山と號す。正或祥に作来る（駿國めぐり祥と有り）。曹洞。阿部郡羽鳥村洞慶院末。御朱印寺領三十石、慶長七壬寅年賜ふ所也。

開山行之正順禪師。寺記曰。開山行之禪師、長享元年、在大正輪^一住^二大洞^三。云云。又曰。行之始住^一宮川清泉寺^二、而草^一創^二大正寺^三、乃有^一長尾白狐、三足野鶲^二、呈瑞兆^一之異^二。又淺畠^一之湖神變考^二女來為^一護法神^二。云云。

本尊釈迦如來、左右迦葉阿難、脇仏大元達磨大師、常時堂本尊地藏、定朝作坐禪堂本尊虛空藏、先德場と額あり、心越筆。鐘樓堂衆寮等あり。（大正寺）有渡郡大谷村に有り。瑞現山と號す。正或祥に作来る（駿國めぐり祥と有り）。曹洞。阿部郡羽鳥村洞慶院末。御朱印寺領三十石、慶長七壬寅年賜ふ所なり。開山行之正順禪師。寺記曰く。開山行之禪師、長享元年、大正に輪在りて大洞に住す。云云。又曰。行之、始め宮川清泉寺に住し、そして大正寺を草創す。すなわち長尾白狐、三足野鶲有りて、瑞兆の異を呈す。又、淺畠の湖神變考の女來て、護法神と為す。云云。本尊は釈迦如來、左右は迦葉阿難、脇仏は大元、達磨大師、常時堂本尊の地藏は定朝の作、坐禪堂本尊の虚空藏、先德場と額あり、心越筆なり。鐘樓堂衆寮等あり。

また、『駿河記』卷九（黙斎 桑原藤泰 稿）、有度郡卷之三「大谷」の項に次のように記載されている（『駿河記』桑原藤泰著 足立鉄太郎校訂 一九三三一五四一頁参考）。

○瑞現山大正寺 洞家 羽鳥洞慶院末 法幢地 慶長七

御朱印符寺領參拾石 本尊釈迦開山行之正順和尚

寺記ニ曰。順ハ者其先信州諏訪住人。桜井氏之胤也。永

正十二年亥六月十九日。示ス滅ヲ於此山。有遺偈曰。

久臥斯病筵惱ス我心ヲ。肉山危處少知音。不知

自ラ擲澗辺去。踏破乾坤泯古今。春秋七十六。只

師之進山在住不詳。其始ヲ何年経中幾年。滅後十旬

シテ而永明大蒲正陸到此掃フ祖塔チ。下文略之。

寺記に曰く。順は其れ先に信州諏訪住人。桜井氏之胤

なり。永正十二年亥六月十九日。滅を此の山に示す。遺

偈有りて曰く。久く病筵に臥し、我心を惱ます。肉山危

舛、知音少なし。知らず自ら澗辺に擲し去る。乾坤を踏

破し、古今に泯(ほろ)ぶ。春秋七十六。只師の進山在

住、其始を何年、幾年経るか詳にせず。滅後十旬してそ

して永明の大蒲正陸、此を到して祖塔を掃ふ。下文之を

略す。

(2) 行之正順禪師……行之正順(?)、一五一五)。駿河大祥寺、
永明寺開山。洞慶院六世(洞慶院については、「賢窓常俊禪
師章」註¹参照)。行之の伝記は『聯燈錄』の他、『統洞上諸
祖伝』卷二に所収されているので、次に挙げ比較する。

大正(正又作祥)寺不知何年建コトヲ。行之禪師為

開山第一祖。其草創必在長享年前。(長享元年行之禪

師在大正)。輪住大洞故。師始メ戻止宮川清泉。

而シテ後チ相攸於此愛其勝ヲ草創大正。乃チ有テ

長尾ノ白狐三足野鶲。呈瑞兆之異。又有本州浅服湖

神変老女。特ニ來テ見ル開山和尚。聽法受菩薩戒。

歡喜シテ自ラ誓テ為護法神。永ク除災之事。後來祭

之為す諏訪。又於本州富士郡原田村ニ創永明寺。

使嗣法弟子太浦正陸ヲ。繼其席。寂照宗昕繼當山

席。於比壇篋互吹テ以テ拳揚ス宗風也。下文略

之。(大正(正または祥と作す)寺、何年に建つことを

知らず。行之禪師、開山第一祖を為す。其の草創、必ず

『統洞上諸祖伝』「大祥寺行之正順禪師傳」

師諱正順。字行之。信州櫻井氏之子。妙然離塵受具。後雲遊留錫於駿陽洞慶院。而參侍大嚴梅禪師甚久。嗣後開山於州之大谷鄉。開號現山大祥寺。化門大開。

尋應敕請。住諸嶽山總持禪寺。指山門曰。十方開豁。三際流通。驟步曰。千門萬戶歸一躍中。

佛殿忽逢遠方友。何須眼中筋。古今無差互。奴見婢慇懃便合掌。

低頭據室。烏藤高吼。黑蛇朗吟。作家鉗鎗光燦爛。鍛鍊鈍鐵作真金。

即日開堂祝聖恩香。爲大嚴酬之。

僧問。一華現瑞當時會。五葉流芳今日傳。只如宰官臨筵龍象交參。祝延一句。請師舉揚。師曰。佛日挑堯天。皇風扇祖域。僧曰。恁麼則總持正印扇沙界。普藏寶珠輝大千。師曰。高底普應前後無差。

僧曰。記得。古德開堂次有僧。問。和尚開堂如何施設。德曰。雲綻家家月。春來處處花。未審是什麼章句。師曰。千差無異轍。萬象目前分。僧曰。和尚今日施設。與古人是同是別。師曰。千年桃核長青梅。僧曰。是須妙手攜來用。百億分身處處真。師曰。龍躍萬年松。虎來千古石。僧曰。已得真人好消息。人間天上更無疑。便礼拜。

僧問。一位纏彰五位分。君臣合處紫雲屯。已是一位纏彰爲甚。五位盡分。師曰。如葢艸味如金剛杵。僧曰。此是依稀彷彿。願

『聯燈錄』「駿州大祥寺行之正順禪師」

駿州大祥寺行之正順禪師。信州櫻井氏子也。夙有靈根。少能割愛。受具後遊方。及到洞慶會中。稍知觸淨遂升堂奧。初於大谷鄉。開梵刹曰大祥。

明應己未稟詔住總持。指山門曰。十方開豁。三際流通。驟步曰。千門萬戶。歸一躍中。

佛殿忽逢遠方友。何須眼中筋。古今無差互。奴見婢慇懃便合掌。

據室。烏藤高吼。黑蛇朗吟。作家鉗鎗光燦爛。鍛鍊鈍鐵作真金。

即日開堂祝聖。恩香爲大嚴酬之。

僧問。一華現瑞當時會。五葉流芳今日傳。只如宰官臨筵龍象交參。祝延一句。請師舉揚。師曰。佛日挑堯天。皇風扇祖域。僧曰。恁麼則總持正印扇沙界。普藏寶珠輝大千。師曰。高底普應前後無差。

僧曰。記得。古德開堂次有僧。問。和尚開堂如何施設。德曰。雲綻家家月。春來處處花。未審是什麼章句。師曰。千差無異轍。萬象目前分。僧曰。和尚今日施設。與古人是同是別。師曰。千年桃核長青梅。僧曰。是須妙手攜來用。百億分身處處真。師曰。龍躍萬年松。虎來千古石。僧曰。已得真人好消息。人間天上更無疑。便礼拜。

僧問。一位纏彰五位分。君臣合處紫雲屯。已是一位纏彰。爲甚五位盡分。師曰。如葢艸味。如金剛杵。僧曰。此是依稀彷彿。

更聽師直說。師曰。栗色伽黎山水紋。五位君臣在比中。

僧曰。記得天寧楷禪師。僧問。師唱誰家曲。宗風嗣阿難。楷曰。金鳳夜棲無影樹。峰巒纔露海雲遮。是何曲調。師曰。一彈少室無私曲。盡是千秋萬歲聲。僧曰。與麼則學人今日聞未聞也。師曰。作麼生是汝聞底。僧曰。聲前一句圓音美。師曰。若臻耳畔不知音。僧曰。十年塵土窟。一寸冰雪消。師曰。相送當門有脩竹。爲君葉葉起清風。僧禮拜。

師不久歸于駿州。而創富士郡永明寺。以爲休息之所焉。自畫圓相。用充壽像。乃題目本無形相。強分愚賢。要看真質。虛靈空圓。

師住大祥二十餘年。永正十二年乙亥六月十九日示寂。嗣子寂

永正十二年六月十九日示寂。嗣子寂照昕住大祥。大補睡領永明。

師不久歸于駿州。而創富士郡永明寺。以爲休息之所焉。

願更聽師直說。師曰。栗色伽黎山水紋。五位君臣在比中。

僧曰。記得。天寧楷禪師。僧問。師唱誰家曲。宗風嗣阿難。楷曰。金鳳夜棲無影樹。峰巒纔露海雲遮。是何曲調。師曰。一彈少室無私曲。盡是千秋萬歲聲。僧曰。與麼則學人今日聞未聞也。師曰。作麼生是汝聞底。僧曰。聲前一句圓音美。師曰。若臻耳畔不知音。僧曰。十年塵土窟。一寸冰雪消。師曰。相送當門有脩竹。爲君葉葉起清風。僧禮拜。

以上、「聯燈錄」と「続洞上諸祖伝」とを比較すると、總持寺晋山における問答がほぼ一致していることが分かる。つまり、行之の伝記を編纂するにあたり、共通の史料を参照したことを窺わせる。

また、行之は龍沢寺（福井県あわら市）に文明八年より二十六世を輪住し、また明応元年に三十四世として再住している。『龍澤寺前住帳』（龍澤寺〔福井県あわら市〕所蔵）には、「廿六世行之順」如仲孫柱首座孫太岩法嗣入寺文明八年丙申、「三十（廿と同種）四行之順 再住、太岩法嗣、入寺明應元年壬子」とある。なお、『龍澤寺前住帳』について、『越前龍沢寺史』越前龍沢寺史刊行会（一九八二）の記述に

よつた。

(3) 信州櫻井氏……ここでは信州（長野県）の櫻井氏を特定できないが、『長野県歴史人物大辞典』（郷土出版社一九八九）には次のようにある。「櫻井五郎」〔吾妻鏡〕に見える鎌倉時代の鷹飼の名人。生没年は不詳。「信濃の住」とあるが、現在の佐久市櫻井か小県郡東部町慈野櫻井のいずれかの出身と考えられる。双方とも古くから開けた土地である。櫻井太郎、次郎の武士が木曾義仲に従い、横田河原（現長野市篠ノ井）や宇治川（京都府）で戦っていることが『平家物語』や『源平盛衰記』にも見え、共に東信濃出身と思われる。（小県郡東部町慈野は現在東御市慈野）。行之が出たとされる櫻

井氏も佐久市桜井か小県郡東部町慈野桜井（東御市滋野）の出身か。

(4) 靈根……人の本来具えている靈妙なはたらき。ここでは、行之が生まれながらに具えている素質、才覚のことであるう。

(5) 少くして能く愛を割き……幼くして肉身や親類の情愛を裁つこと。出家すること。「五燈會元」の「慧林懷深禪師」

〔五燈會元〕下 一〇八八頁 中華書局 一九八二には、

次のようにある。() 内は筆者による訓読。

東京慧林懷深慈受禪師、壽春府夏氏子。生而祥光現舍、文殊堅禪師遙見、疑火也。詰旦、知師始生、往訪之。師見堅輒笑、母許出家。十四割愛冠祝髮。後四年、訪道方外、依淨照

於嘉禾資聖。（東京慧林懷深慈受禪師 寿春府夏氏の子。生

して祥光、舍に現し、文殊堅禪師、遙見し、火を疑うなり、

詰旦、師、生を始めるを知り、之を往訪す。師、見堅嘲笑し、母、出家を許す。十四にして割愛し祝髮を冠る。後四年、道

を方外に訪ね、依淨に嘉禾資聖を照らす。）

(6) 洞慶……洞慶寺。「賢慈常俊禪師」註記 (1) 参照。

(7) 觸淨……觸は不淨。淨は清淨。転じて、惡意や邪念のある

人と心の潔白な人をさしていう。『禪苑清規』三に「應須字體真指、言語整齊、封角如法、及識尊卑觸淨僧俗所宜。(応

すべからく字体真楷にして、言語整齊、封角如法にして、および尊卑、触淨、僧俗の宜しきところを知るべし。) とある。〔訓読部分、『訣注 禪苑清規』鏡島元隆、佐藤達玄、小坂機融著 曹洞宗宗務序 一九七二 参照〕

(8) 大谷の郷に於いて……梵刹は、寺院のこと。大祥寺は、現

在の大正寺。本章註記 1 参照。

〔原文〕

明應己未稟詔住總持。指山門曰。十方開豁。三際流通。驛步曰。千門萬戶。歸一躍中。佛殿忽逢遠方友。何須眼中筋。古今無差互。奴見婢慇勸。便合掌低頭。

據室。烏藤高吼。黑蛇朗吟。作家鉗鉗光燦爛。鍛鍊鈍鐵作真金。

即日開堂祝聖。

恩香。爲大巖酬之。

僧問。一華現瑞當時會。五葉流芳今日傳。只如宰官臨筵龍象

交參。祝延一句。請師舉揚。師曰。佛日挑堯天皇風扇祖域。

僧曰。恁麼則總持正印扇沙界。普藏寶珠輝大千。師曰。高底

普應前後無差。

僧曰。記得。古德開堂次有僧。問。和尚開堂如何施設。德曰。

雲綻家家月。春來處處花。未審是什麼章句。師曰。千差無異

轍。萬象目前分。僧曰。和尚今日施設。與古人是同是別。師

曰。千年桃核長青梅。僧曰。是須妙手攜來用。百億分身處處

眞。師曰。龍躍萬年松。虎來千古石。僧曰。已得真人好消息。

人間天上更無疑。便礼拜。

〔訓読〕

明應己未、詔を稟て總持に住す。^{うけ} 山門を指して曰く、「十方

開豁、三際流通」。驟歩して曰く、「千門万户、一躍の中に帰す」。

仏殿。「忽ち遠方の友に逢う、何ぞ須いん眼中の筋。古今差互無し、奴は婢を見て慇懃す。」便ち合掌低頭。拠室す。「烏藤高く吼え、黒蛇朗かに吟す。作家の鉗鎌、光り燐爛、鈍鐵を鍛錬して真金と作す。」

即日開堂祝聖。

恩香。「大巖の為に之れを酬う。」

僧問う。「一華、瑞を現ず當時の会。五葉、芳を流す今日の伝、只、宰官、筵に臨み龍象交參するがごとし。祝延の一句、請う師、挙揚せよ。」師曰、「仏日堯天に挑け皇風祖域を扇く。」

僧曰。「恁麼なるときんば、總持の正印、沙界に扇き、普藏の宝珠、大千に輝く。」師曰。「高底普く応じて前後差無し。」

僧曰、「記得す。古徳開堂の次、僧有りて問ふ、「和尚開堂如何か施設す」。徳曰、「雲は綻ぶ、家家の月、春は来る、処処の花」未だ審し是れ什麼の章句ぞ。」師曰、「千差轍を異にすること無し。万象、目の前に分る。」僧曰、「和尚、今日施設、古人とはれ同か、是れ別か。」師曰、「千年の桃核、青梅を長す。」僧曰、「是、須く妙手に携来て用ゆ。百億分身、処處真。」師曰、「龍は、躍る万年の松。虎は、来千古の石。」僧曰、「已に真人の好消息を得て、人間天上更に疑無し。」便

ち礼拝す。

〔註記〕

(9) 明応己未……明応八年（一四九九）に綸旨を受けて總持寺にのぼる。『曹全』「大系譜」には、三七九世とある。

(10) 山門を指して曰く……山門法語。「十方」はすべての方向をさし、「三際」は過去を前際・現在を中心・未来を後際といい、時空を超えて仏法がひろまる様をいう。『驟歩』は、早く駆けるように歩くことをいい、法語中に山門を通り抜けた様子が窺われる。

(11) 怪ち遠方の友に逢う……仏殿法語。ここでいう「遠方の友」とは、仏殿の本尊のことであろう。本尊と行之間に違和感はなく、時空を超えて「一体化」していることをしめしていると思われる。また、『碧巖錄』第二三則「雪峰鼈鼻蛇」本則には、文政六年（一八二三）に重刻刊行された『玉雲開祖太容禪師語錄』を底本としている。

なお、『太容禪師語錄』について、『新修門前町史』では、貞享五年（一六八八）版を底本としており、『曹全』は、文政六年（一八二三）に重刻刊行された『玉雲開祖太容禪師語錄』を底本としている。

『碧巖錄』第二三則「雪峰鼈鼻蛇」本則には、同坑無異土。奴見婢殷勤。同病相憐。同坑に異土無し。奴は婢を見て殷勤。同病相憐む。』とあることから、ここでは「奴」が本尊を、「婢」は行之を指し、その一体化が説かれて

いるのであろう。

(12) 烏藤高く吼え……方丈に座しての法語。「烏藤」は葛の杖、山からとつたままの荒々しい杖のことで、ここでは拄杖を指し、「黒蛇」は竹籠を指す。また、「鉗鎌」の鉗は鍛冶に用いられる金ばさみ、鎌は金づちのこと。ここでは、師家と修行者とを指していよう。いずれも、師家と衆生を仏法の象徴である仏具に喩え、修行者を鍛錬することを表わすものと思われる。

(13)

恩香……「大巖」は大巖宗梅(?)一五〇二)で、行之の師。前章「賢窓常俊章」の註記1参照。大巖宗梅の為に香を焚いている。当時の總持寺の開堂形式を詳しく記録しているであろう『太容禪師語錄』(本章注記10参照)によれば、拋室、拈衣、指法座、拈香(祝聖、今上皇帝の為の香)、拈香(大檀那の為の香)、拈香(恩香、師の為の香)と続いていることから、ここでは祝聖、恩香以外の記録が省略されていることが予想される。

(14)

一華……達磨の語である「一華開五葉、結果自然成」の語が踏まえられている。達磨から五代の祖師を経て禪宗の教えが花開くとも、あるいは、禪宗が五家として分かれ花開くとももされる。

(15)

宰官……宰官は役人のこと。ここでは、詔により總持寺にのぼる際、僧だけではなく役人も列席したことが窺える。

(16)

仏日堯天に……堯天は、聖天子の徳を天になぞらえている。皇風は天子による教化、祖域は禪門、祖園のこと。ここでは、王法仏法が助け合うことを示している。

(17)

沙界……恒河沙の世界のこと。恒河にある沙のように無量無数の多くの世界をいう。

(18)

施設す……恩徳または教化をほどこしに行うこと。

(19) 雲は綻ぶ……葉縣帰省(不詳)の語。『古尊宿語錄』卷第二十三、汝州葉縣廣教省禪師語錄に「師云。雲綻家家月。春來

處處花。問不落諸縁。請便道。(雲は綻ぶ、家家の月、春は来る、处处の花。諸縁、落つること問わず。便に道を請ふ。)事事を了畢。數年後、葉縣廣教院に住した。

(20) 千年の桃核……千年の桃核は、千年もの劫を経てカチカチになつた桃の種のこと。手のつけられぬ硬直した教条主義に

喻える。『聯珠通集』に「一見明星夢便回、千年桃核長青梅、雖然不是調羹味、会与將軍止渴來。(明星の夢便に回を一見し、千年の桃の核青梅を長す。しかしといえどもこれ羹味を調せず、会は將軍に渴を來して止む。)」

(21) 妙手に携来て用ゆ……『曹全』は「妙」、版本は「妙」を用いている。妙手(妙手)は、巧妙な手段のこと。『宏智錄』に「是須妙手携來用。百億分身處處真。」の句がある。

〔原文〕

僧問。一位纔彰五位分。君臣合處紫雲屯。已是一位纔彰。爲甚五位盡分。師曰。如圭坤味。如金剛杵。僧曰。此是依稀彷彿。願更聽師直說。師曰。栗色伽黎山水紋。五位君臣在比中。僧曰。記得。天寧楷禪師。僧問。師唱誰家曲。宗風嗣阿難。楷曰。金鳳夜棲無影樹。峰鸞纔露海雲遮。是何曲調。師曰。一彈少室無私曲。盡是千秋萬歲聲。僧曰。與麼則學人今日聞未聞也。師曰。作麼生是汝聞底。僧曰。聲前一句圓音美。師曰。若臻耳畔不知音。僧曰。十年塵土窟。一寸冰雪消。師曰。

相送當門有脩竹。爲君葉葉起清風。僧禮拜。

師不久歸于駿州。而創富士郡永明寺。以爲休息之所焉。永正十二年六月十九日示寂。嗣子寂照昕住大祥。大補睡領永明。

〔訓説〕

僧問、「一位^{とだん}纔に彰て、五位に分し、君臣、合ふ處紫雲屯^{とじま}る。」已には、一位、纔に彰てなんとしてか、五位^{こいとう}尽く^{つく}分る。」師曰、「莖草の味の如し。金剛の杵の如し。」²³僧曰、「此は是れ依稀彷彿²⁴、願くは更に師の直説を聽かん。」師曰、「栗色の伽黎²⁵、山水の紋、五位君臣比の中に在り。」

僧曰、「記得す。天寧の楷禪師、僧問「師、誰か家の曲を唱へ、宗風、阿誰にか嗣ぐ。」楷曰、「金鳳夜棲む無影樹、峰鸞²⁶纔に露て海雲遮る。」是れ何の曲調ぞ。」師曰、「一彈す。少室無私²⁷の曲、尽く是れ千秋万歲²⁸の声。」僧曰、「与慶なることは、則、学人今日、未聞を聞けり。」師曰、「作慶生か是れ汝か聞底。」僧曰、「声前の一句、円音美なり。」師曰、「若し耳畔に臻^{いたな}は、知音にあらず。」僧曰、「十年塵土の窟、一寸冰雪消す。」師曰、「相送れば門に当て、脩竹有り。君が為に、葉葉、清風を起こす。」僧礼拝。

師、久せずして駿陽²⁹〔曹全「州」、版本「陽」〕に帰す。しかうして富士郡に永明寺³⁰を創て、以て休息の所と為す。永正

十二年六月十九日示寂。嗣子、寂照の昕、大祥に住し、大補睡³¹の睦、永明を領す。

〔註記〕

(22) 一位、纔に彰て五位に……この質問は、吉祥元実の悟道の偈を踏まえる。たとえば「五燈會元」「吉祥元実禪師章」(中華書局本「五燈會元」下)、九一九頁)には、「一位纔彰五位分、君臣叶處紫雲屯。夜明簾卷無私照、金殿重重顯至尊。(一位纔かに彰われば五位分る、君臣叶ふ處、紫雲屯す。夜明簾卷、私照なし、金殿重重、至尊を顯わす」とある。君臣五位等で示されるよう、仏果の「一位」をあくまで傍参考提する曹洞の宗旨のありようを問う。「紫雲」は高徳の人のあることを示すなどの瑞相で、ここでは仏の所在、すなわち「一位」の所在を示す。

(23) 莖草の味の如し……「宝鏡三昧」にみられる句。「洞山寶鏡三昧」(禪家語錄) II、西谷啓治 柳田聖山編 筑摩書房一九七四)によれば、莖草は、めどき・めどはぎのことで、

甘・酸、辛・苦、鹹味(からみ)の五味をもち、金剛の杵は、もと武具、真言宗では法具にとりいられ、煩惱を碎破する意味を持つとされる。また、一莖草が五味を含み、一金剛杵が五鉢を具えているがごとくである、と説明されている。彷彿²⁴も同様の意。

(25) 栗色の伽黎……「栗色の伽黎山水の紋」は地味で素朴な僧伽黎衣(七条の袈裟)のこと、これを挂けて修行している行²⁵自身に「五位君臣」と示される曹洞の宗旨が十全に示されているの意。

天寧の楷禪師……芙蓉道海（一〇四三—一一一八）の語。

禪門拾遺集には「荊州大陽山禪師因僧問、師唱誰家曲。宗風嗣阿詣師云、金鳳夜棲無影樹。峯巒纏綠海雲遮」とある。芙蓉道海は、山東の人。安徽省の投子山において、義青に見え嗣法する。一一〇七年、東京（河南省）の天寧寺に住した。

(28) 少室無私……少室は少室山、または少室山に住した達磨のこと。無私は無我と同意語で、自我意識以前のいのちそのものの絶対的実態（すがた）をいう。

30 25 優竹……修竹ともいい、細長い竹のこと。
永明寺……永明寺（静岡県富士市）のこと

永正十二年六月十九日示寂……一五二七年六月十九日示寂。
（按照）行、大祥之生。又照（行）、一五三〇。三月

〔愛知県〕の人。大正寺二世。『洞上諸祖伝』三、『聯燈錄』

八所取。大輔王圭
水明子頤十。大輔王圭
(三)一五三二。水明

3 大都の脇 永明を継ぐ。大都正脇(三)一五三二
寺二世、竜沢寺四十七世の外、大洞院、総持寺に住す。『聯

燈錄
八所收。

17

(曹全—史伝上) 三七二頁下段)

註記

〔原文〕
駿州智滿寺回夫慶文禪師。參大巖於洞慶。一見器之。命掌藏。親炙六年。入堂首衆。一日巖普說舉。問傳大士心王銘云。水中
鹽味。色裏膠青。決定是有。不見其形。師於言下有省。詣呈

（）駿州智満寺……正しくは遠州智満寺。一延喜度曹洞宗寺院本末帳には、「遠江國仁木原郡上長尾村 智満寺」とあり、現在の静岡県榛原郡川根本町上長尾に在する曹洞宗寺院、千葉山智満寺のこと。当寺は平安時代後期に草創され、当初千手觀音菩薩像を本尊とし、山号を千葉山、寺号を智満寺と称した。一説には、現静岡県島田市千葉の智満寺の末寺として、奥大井に天台教学の拠点として開かれたとの口伝がある。南

所悟。巖領之。師從是退職。遂往川根鄉。結茅而居。漸成叢
席。今之智滿寺是也。巖以書招之不至。乃令人賚法衣頂相贊。
大永四年甲申四月二十日示寂。出久峰昌一人。

訓
讀

駿州智満寺回夫慶文禪師、大巖に洞慶⁽¹⁾に参ず。一見して之れを器とし、命じて藏を掌せしむ。⁽²⁾親炙⁽³⁾すること六年。堂に入りて衆に首たり。⁽⁴⁾一日、巖、普説す。⁽⁵⁾拳す。「傳大士心王の銘に云く、水中の塩味、色裏の膠青。⁽⁶⁾決定して是れ有り、其の形を見⁽⁷⁾ず。」師、言下に省有り。⁽⁸⁾詣して所悟を呈す。⁽⁹⁾巖之れに領く。⁽¹⁰⁾師、是れに従いて退職し、遂に川根の郷⁽¹¹⁾に往く。⁽¹²⁾茅を結びて居す。漸く叢席と成る。今⁽¹³⁾の智満寺はれなり。巖、書を以て之れを招くに至らず。乃ち人をして法衣頂相の贊を賜さしむ。⁽¹⁴⁾大永四年甲申四月二十日示寂。久峰の昌⁽¹⁵⁾一人を出だす。

北朝時代、現島田市智満寺の住僧が、反尊氏党として大津城（現島田市）に立て籠もった佐竹兵庫入道らに味方し、一緒に徳山城に逃れたとされ、文和二年（一二五三）徳山城落城後、当地（川根本町上長尾）で寺を再建したと伝える。ちなみに『御願寺 駿河国智満寺 記録写』には、「弘治ノ頃、世不^{よき}靜亦騒^{あわ}ケ敵^{てき}城^{じゆ}テ智満寺現在モ山中遠州河根上奈郷辺ニ隠住、且^{また}クモ蟄居セント也。其レニ依リ彼ノ地開テ一寺トナシ是モ千葉山智満寺ト呼。扱此ノ乱世ニ遇テ寺領其沙汰雜亂定ル住僧安堵ナラス、無住同前ニ或ハ地僧持數ヶ年日月ヲ送ル、此時寺領古書物住宝紛失ス古老伝ヘリ」（島田市史）所収）とあり、上記の内容を窺わせる。又『静岡県史』資料編七^{（風教）}には、同寺に「奉奇^{（瑞）}進川上^{（山）}山藥師道鰐口^{（天）}大旦^{（那）}別當^{（昌）}天文廿二年式月^{（久峰）}なる銘の鰐口^{（昌）}があることが分かり、中世におけるその存在を窺わしめる。さらに『榛原郡誌』には、「由緒、本寺洞慶院三代大巣和尚の弟子回天慶文師命に依り延徳三年（一四九一）開基し、同年殿堂建立。旧朱印高二九石」と記され、延徳三年に駿河国・洞慶院より回夫慶文を迎えて曹洞宗寺院に改められたことが分かる。上長尾の智満寺は、「河根の法窟」と称され、回夫派の派頭寺院として、江戸時代末期までは門葉一〇〇ヶ寺に及ぶ禅宗の修行道場であり、『延享度曹洞宗寺院本末帳』には、同寺末寺として、遠江国榛原郡家山村（現静岡県榛原郡川根町家山）の三光寺、及び末寺十数ヶ寺を数える回夫派寺院があげられている。また明治初年の『旧高旧領取調帳』によれば、先述したように、智満寺の朱印高は二九石となっている。この朱印地二九石に関する初見は、慶安元年（一六四八）二月二十四日、『徳川家光寺領寄附朱印状写』（静岡県史料第四輯 遠州古文書）一六六頁）であり、「遠江国榛原郡智満寺領・同郷河

根上長尾村貳拾九石事。・任^三先寄^二附之訖。全可収納。并寺中門前林竹木諸役・等免除。永不可^一有^二相^三違者也。』とあることから、家康時代からのものが引き続き安堵されていたと考えられる。

(2)

回夫慶文禪師……？（一五二四）。遠州智満寺の開山。洞慶院大巣宗梅のもとで知藏となり、六年後僧堂における首座となる。のち遠州河根郷に庵を営んだ（のちに智満寺となる）。大巣が書を送つて招いたが応じず、人をして法衣並びに頂相の贊を送らせた。（この原文に依拠した智満寺成立の経緯は、前註1に記した、回天が遠州河根の智満寺の開基として迎えられたことと齟齬するが、その件については後述する。）大永四年（一五二四）四月二十日示寂。法嗣の久峰慶（文）昌、伝浮芸（原文には「久峰の昌一人」とあるが、『曹洞宗全書系譜』『日本洞上宗派図』には伝浮芸の名がみられる。）の内、前者は後述する洞慶院六世であり、また、『曹洞宗大系譜』によれば、静岡県長興寺の開山（『日本洞上宗派図』には同寺二世）でもある。

(3)

大巣……大巣宗梅（？～一五〇二）。前章「賢窓常俊禪師」の註2参照。

(4)

洞慶……前章「賢窓常俊禪師」の註1参照。

(5)

一見して之れを器とし……器とは、人間の器量や才能のこと。大巣が回夫を見るやいなや、仏道を歩む者として、また、藏殿を治めるものとしての適性を察知したこと。

(6)

命して藏を掌せしむ……「藏」とは藏殿のこと。「掌す」とはつかさどる、受けもつの意。したがつて大巣に命じられて、経蔵をつかさどる蔵主になつたこと。

(7)

親炙……親しく接してその教化を受けること。

（8） 堂に入りて衆に首たり……「堂」とは僧堂のこと。「衆に首

たり」とは、修行僧中の第一座で頭領の次位、すなわち首座に任命され、修行僧を導く立場についたこと。

(9) 普説……宗旨を挙揚して学人を説得するため、普段に行われる禅家の法式。この語の意味は、普く一切の法を説く、普く三世を説くなどと、一定の説がない。普説も上堂も陞座であるが、普説は祝香をたかず、法衣も掛けない。宋の真淨克文（一〇二五～一〇二九）より始まるという。

(10) 傅大士心王の銘……原文には「傳」とあるが、「傳」の誤り。「傅大士」とは梁の傅翕（ふき）（四九七～五六九）（慧大士）のこと。「心王銘」一巻は、傅大士によつて撰述された、四言八句三四四字から成る韻文體の小篇。日本曹洞宗僧侶においても、しばしば引用される。『景德伝灯錄』三十卷に『傅大士心王銘』として所収。

(11) 水中塩味～其の形を見ず……「水中の塩味」以下の文言は、この「心王銘」からの引用（禅文化研究所編『基礎典籍叢刊』『景德伝灯錄』六一五頁下段）。「水中の塩味」とは、水の中に含まれている塩分。「色裏の膠青」とは絵の具の中に調合されている膠。水中の塩分も絵の具の膠も、はつきり混入されていることはわかっていても取り出すことが出来ないということ。実在するけれども姿は見えないものを喻えている。

従つて本文は「決定して是れ有り、其の形を見ず」と続き、つまり絶対に自身に仏心はあるけれど、現実の自身を離れてはとらえることが出来ないことを意味している。

(12) 師、言下に省有り……「省」とは、自己の本心を明らかめること。大巣の普説を聞いて、即座に悟りを開いたこと。

(13) 詣して所悟を呈す……恭しく大巣の前に進み出て、回夫が自分の悟りの境界を提示したこと。額く……便宜上このように訓読した。提示された境界を大

(15) 川根の郷……河根郷とも称する。戦国期から見られる郷名。遠江国榛原郡のうち。智満寺のある上長尾を中心とする現在の川根本町一帯を広く河根と称したと推測される。ちなみに、慶長八年（一六〇三）九月一八日の「浅原喜蔵手形写」には「遠州榛原郡河根智満寺領之事。合貳貫九百文者永樂錢。但六文立。右於京都。御所様得御詫。如前々付置申候。為其手形。仍如件。」（『静岡県史料 第四輯 遠州古文書』一六五）一六六頁、とある。

(16) 茅を結びて是れなり……「茅を結び」は、茅で葺いた粗末な庵を造るの意。修行道場を離れ庵居したことを表す。前註2でも触れたように、回夫が庵居した場が、現在の川根本町の智満寺前身と説明する原文と、前註1で引用した『榛原郡誌』の回夫が開基として既に存在していた同寺に迎えられたとする説は齟齬している。この件については、川根の郷に粗末な庵を結んでいた回夫が、民衆の意を集め、既に存していた智満寺に迎え入れられたと解釈したい。

(17) 法衣頂相の贊を賛さしむ……禅宗では伝法の証として師から弟子へ法衣や、師本人の贊の記された頂相などが授けられる。本文では大巣が弟子回夫慶文を洞慶院に呼び戻すことが出来なかつたため、同寺の僧であろうか、回夫自身であろうか、人を使わして形式的に上記二点を智満寺にもたらしたこと。同寺には、上記頂相・法衣等が所蔵されていたようだが、現在は焼失してしまつたようである。

(18) 久峰の昌……回夫慶文の法嗣、久峰慶（文）昌。その法嗣久峰の昌（昌光寺三世）、月叟周印がいる。

18. 裁松青牛禪師

〔曹洞宗全書〕史伝上、三七二頁下～三七三頁上)

〔原文〕

瑞龍實菴祥參禪師法嗣

奥州頭陀寺裁松青牛禪師。肥後人。下髮於某寺。天資敏悟。脫灑無礙。不貯道具。不拘律儀。徧游師席。無所省。過羽之米澤。謁瑞龍實菴禪師。令參趙州狗子話。師晝夜精勵。脇不著席。一旦豁然契悟。有偈曰。大地山河隱此無。山河大地顯此無。春天花與冬天雪。非有非無無亦無。菴一見曰。汝甚有超師之智。但自能保護。

〔訓読〕

瑞龍實菴祥參禪師法嗣

奥州頭陀寺裁松青牛禪師。肥後⁽⁵⁾の人。某の寺に下髮す⁽⁶⁾。天資敏悟にして、脱灑無礙、道具を貯えず、律儀に拘らず⁽¹⁰⁾。徧く師席に遊び、所省無し。羽の米沢に過ぎて瑞龍の実菴禪師に謁す。趙州狗子の話に參ぜしむ。師、昼夜精勵し、脇、席に著けず⁽¹⁵⁾。一旦、豁然として契悟す。偈有りて曰く、「大地山河、此の無に隠る。山河大地、此の無を顯わす。春天の花と冬天の雪、有に非ず無に非ず、無も亦た無」。菴、一見して曰く、「汝、甚だ超師の智有り。但だ自ら能く保護

せよ。」

〔註記〕

(1) 瑞龍……山形県西置賜郡(白鷹町大字高玉)に所在する稻荷山瑞龍院のこと。享徳二年(一四五三)開創とされ、開山は物外性応(?)、一四五八)、開基は伊達持宗(一三九三)、一四六九)。青牛は瑞龍院第二世。曹洞宗の名刹として末寺三五〇を数える。文明七年(一四八五)に准勅願所となり、國家鎮護・玉体安穩を祈願する場所として「綸旨」を賜つてある。勅使門は今に残り、「紫震閣」という額があり、皇室が榮えるように祈る場所という意味が込められている。

なお、寺院開創に因んで次のような言い伝えがある。物外が寺を開こうと場所を探していたところ、高玉の方に何かが光っているのが見えた。行ってみると、光る玉を抱いた金色の龍であった。物外が土地を譲つて欲しい旨を言うと、龍は了解しその場所を明け渡して山に消えていった。次に、寺を建てる具体的な場所を決めるに当たって、白狐が現れ手招きをしたので、そこに寺を建てることとなつた。

この話に基づき、お稲荷様(狐)の招きに応じたので「稲荷山」、玉龍がいたので「瑞龍院」と名付けられたとされる。

(2) 実菴祥參……(一四六七)駿州(静岡県)の人で、物外性応の法嗣。海藏寺(静岡県袋井市)の物外の下で出家し、諸方を遊歴した後、再び物外の下に参じて法を嗣ぐ。總持寺に出世した後、瑞龍院二世となり、再び總持寺に住して紫衣を賜つたとされる。伝記としては『聯燈錄』六(三五〇頁上)にある。

(3) 奥州頭陀寺……福島県伊達郡(川俣町飯坂字頭陀寺二番地)に所在する鶴足山頭陀寺のこと。延徳二年(一四九〇)開創、

開山は栽松青牛。開基は伊達種宗（一四八八—一五六五）とされるが年代が合わない。十七ヶ寺の末寺を有する。再三の火災によつて昔の面影を偲ぶことはできないが、文化十四年（一八一七）に製作された回転輪藏あり、川俣町の有形文化財に指定されている。總ヶヤカ造りで、たたき土間にすえられた右彫の蓮台を軸に回転し、八角形八面に設けられた書架には一切経鉄眼版（天和元年（一六八二）版）七千三百三十四巻が納められている。

（4）なお「奥州」は陸奥ともいい、白河・勿来以北の福島・宮城・岩手・青森の四県と秋田県の一部に相当する。

栽松青牛……（一五〇六）伝記は、ここに掲載される他、『統日域洞上諸祖伝』二にも見えるが、簡に過ぎ、誤解ないし誤字と思われる部分も存在する。

師諱青牛。自称栽松道者。不詳年甲籍貫。嘗見龍澤実菴和尚。請問大事。菴令參趙州狗子話。師昼夜單提。脇不著席。一旦豁爾契悟。有頌曰。大地山河隱此無。山河大地顯此無。春天花与冬大雪。非有面無亦無。菴一見称超師之智。遂延寢室親伝衣盃。後開奥州頭陀寺而終焉。

（5）（6）（7）（8）（9）（10）（11）（12）（13）（14）（15）（16）（17）（18）（19）（20）（21）（22）（23）（24）（25）（26）（27）（28）（29）（30）（31）（32）（33）（34）（35）（36）（37）（38）（39）（40）（41）（42）（43）（44）（45）（46）（47）（48）（49）（50）（51）（52）（53）（54）（55）（56）（57）（58）（59）（60）（61）（62）（63）（64）（65）（66）（67）（68）（69）（70）（71）（72）（73）（74）（75）（76）（77）（78）（79）（80）（81）（82）（83）（84）（85）（86）（87）（88）（89）（90）（91）（92）（93）（94）（95）（96）（97）（98）（99）（100）（101）（102）（103）（104）（105）（106）（107）（108）（109）（110）（111）（112）（113）（114）（115）（116）（117）（118）（119）（120）（121）（122）（123）（124）（125）（126）（127）（128）（129）（130）（131）（132）（133）（134）（135）（136）（137）（138）（139）（140）（141）（142）（143）（144）（145）（146）（147）（148）（149）（150）（151）（152）（153）（154）（155）（156）（157）（158）（159）（160）（161）（162）（163）（164）（165）（166）（167）（168）（169）（170）（171）（172）（173）（174）（175）（176）（177）（178）（179）（180）（181）（182）（183）（184）（185）（186）（187）（188）（189）（190）（191）（192）（193）（194）（195）（196）（197）（198）（199）（200）（201）（202）（203）（204）（205）（206）（207）（208）（209）（210）（211）（212）（213）（214）（215）（216）（217）（218）（219）（220）（221）（222）（223）（224）（225）（226）（227）（228）（229）（230）（231）（232）（233）（234）（235）（236）（237）（238）（239）（240）（241）（242）（243）（244）（245）（246）（247）（248）（249）（250）（251）（252）（253）（254）（255）（256）（257）（258）（259）（260）（261）（262）（263）（264）（265）（266）（267）（268）（269）（270）（271）（272）（273）（274）（275）（276）（277）（278）（279）（280）（281）（282）（283）（284）（285）（286）（287）（288）（289）（290）（291）（292）（293）（294）（295）（296）（297）（298）（299）（300）（301）（302）（303）（304）（305）（306）（307）（308）（309）（310）（311）（312）（313）（314）（315）（316）（317）（318）（319）（320）（321）（322）（323）（324）（325）（326）（327）（328）（329）（330）（331）（332）（333）（334）（335）（336）（337）（338）（339）（340）（341）（342）（343）（344）（345）（346）（347）（348）（349）（350）（351）（352）（353）（354）（355）（356）（357）（358）（359）（360）（361）（362）（363）（364）（365）（366）（367）（368）（369）（370）（371）（372）（373）（374）（375）（376）（377）（378）（379）（380）（381）（382）（383）（384）（385）（386）（387）（388）（389）（390）（391）（392）（393）（394）（395）（396）（397）（398）（399）（400）（401）（402）（403）（404）（405）（406）（407）（408）（409）（410）（411）（412）（413）（414）（415）（416）（417）（418）（419）（420）（421）（422）（423）（424）（425）（426）（427）（428）（429）（430）（431）（432）（433）（434）（435）（436）（437）（438）（439）（440）（441）（442）（443）（444）（445）（446）（447）（448）（449）（450）（451）（452）（453）（454）（455）（456）（457）（458）（459）（460）（461）（462）（463）（464）（465）（466）（467）（468）（469）（470）（471）（472）（473）（474）（475）（476）（477）（478）（479）（480）（481）（482）（483）（484）（485）（486）（487）（488）（489）（490）（491）（492）（493）（494）（495）（496）（497）（498）（499）（500）（501）（502）（503）（504）（505）（506）（507）（508）（509）（510）（511）（512）（513）（514）（515）（516）（517）（518）（519）（520）（521）（522）（523）（524）（525）（526）（527）（528）（529）（530）（531）（532）（533）（534）（535）（536）（537）（538）（539）（540）（541）（542）（543）（544）（545）（546）（547）（548）（549）（550）（551）（552）（553）（554）（555）（556）（557）（558）（559）（560）（561）（562）（563）（564）（565）（566）（567）（568）（569）（570）（571）（572）（573）（574）（575）（576）（577）（578）（579）（580）（581）（582）（583）（584）（585）（586）（587）（588）（589）（590）（591）（592）（593）（594）（595）（596）（597）（598）（599）（600）（601）（602）（603）（604）（605）（606）（607）（608）（609）（610）（611）（612）（613）（614）（615）（616）（617）（618）（619）（620）（621）（622）（623）（624）（625）（626）（627）（628）（629）（630）（631）（632）（633）（634）（635）（636）（637）（638）（639）（640）（641）（642）（643）（644）（645）（646）（647）（648）（649）（650）（651）（652）（653）（654）（655）（656）（657）（658）（659）（660）（661）（662）（663）（664）（665）（666）（667）（668）（669）（670）（671）（672）（673）（674）（675）（676）（677）（678）（679）（680）（681）（682）（683）（684）（685）（686）（687）（688）（689）（690）（691）（692）（693）（694）（695）（696）（697）（698）（699）（700）（701）（702）（703）（704）（705）（706）（707）（708）（709）（710）（711）（712）（713）（714）（715）（716）（717）（718）（719）（720）（721）（722）（723）（724）（725）（726）（727）（728）（729）（730）（731）（732）（733）（734）（735）（736）（737）（738）（739）（740）（741）（742）（743）（744）（745）（746）（747）（748）（749）（750）（751）（752）（753）（754）（755）（756）（757）（758）（759）（760）（761）（762）（763）（764）（765）（766）（767）（768）（769）（770）（771）（772）（773）（774）（775）（776）（777）（778）（779）（779）（780）（781）（782）（783）（784）（785）（786）（787）（788）（789）（790）（791）（792）（793）（794）（795）（796）（797）（798）（799）（800）（801）（802）（803）（804）（805）（806）（807）（808）（809）（810）（811）（812）（813）（814）（815）（816）（817）（818）（819）（820）（821）（822）（823）（824）（825）（826）（827）（828）（829）（830）（831）（832）（833）（834）（835）（836）（837）（838）（839）（840）（841）（842）（843）（844）（845）（846）（847）（848）（849）（850）（851）（852）（853）（854）（855）（856）（857）（858）（859）（860）（861）（862）（863）（864）（865）（866）（867）（868）（869）（870）（871）（872）（873）（874）（875）（876）（877）（878）（879）（880）（881）（882）（883）（884）（885）（886）（887）（888）（889）（889）（890）（891）（892）（893）（894）（895）（896）（897）（898）（899）（900）（901）（902）（903）（904）（905）（906）（907）（908）（909）（910）（911）（912）（913）（914）（915）（916）（917）（918）（919）（920）（921）（922）（923）（924）（925）（926）（927）（928）（929）（930）（931）（932）（933）（934）（935）（936）（937）（938）（939）（940）（941）（942）（943）（944）（945）（946）（947）（948）（949）（950）（951）（952）（953）（954）（955）（956）（957）（958）（959）（960）（961）（962）（963）（964）（965）（966）（967）（968）（969）（970）（971）（972）（973）（974）（975）（976）（977）（978）（979）（980）（981）（982）（983）（984）（985）（986）（987）（988）（989）（990）（991）（992）（993）（994）（995）（996）（997）（998）（999）（1000）（1001）（1002）（1003）（1004）（1005）（1006）（1007）（1008）（1009）（1010）（1011）（1012）（1013）（1014）（1015）（1016）（1017）（1018）（1019）（1020）（1021）（1022）（1023）（1024）（1025）（1026）（1027）（1028）（1029）（1030）（1031）（1032）（1033）（1034）（1035）（1036）（1037）（1038）（1039）（1040）（1041）（1042）（1043）（1044）（1045）（1046）（1047）（1048）（1049）（1050）（1051）（1052）（1053）（1054）（1055）（1056）（1057）（1058）（1059）（1060）（1061）（1062）（1063）（1064）（1065）（1066）（1067）（1068）（1069）（1070）（1071）（1072）（1073）（1074）（1075）（1076）（1077）（1078）（1079）（1080）（1081）（1082）（1083）（1084）（1085）（1086）（1087）（1088）（1089）（1090）（1091）（1092）（1093）（1094）（1095）（1096）（1097）（1098）（1099）（1100）（1101）（1102）（1103）（1104）（1105）（1106）（1107）（1108）（1109）（1110）（1111）（1112）（1113）（1114）（1115）（1116）（1117）（1118）（1119）（1120）（1121）（1122）（1123）（1124）（1125）（1126）（1127）（1128）（1129）（1130）（1131）（1132）（1133）（1134）（1135）（1136）（1137）（1138）（1139）（1140）（1141）（1142）（1143）（1144）（1145）（1146）（1147）（1148）（1149）（1150）（1151）（1152）（1153）（1154）（1155）（1156）（1157）（1158）（1159）（1160）（1161）（1162）（1163）（1164）（1165）（1166）（1167）（1168）（1169）（1170）（1171）（1172）（1173）（1174）（1175）（1176）（1177）（1178）（1179）（1180）（1181）（1182）（1183）（1184）（1185）（1186）（1187）（1188）（1189）（1190）（1191）（1192）（1193）（1194）（1195）（1196）（1197）（1198）（1199）（1200）（1201）（1202）（1203）（1204）（1205）（1206）（1207）（1208）（1209）（1210）（1211）（1212）（1213）（1214）（1215）（1216）（1217）（1218）（1219）（1220）（1221）（1222）（1223）（1224）（1225）（1226）（1227）（1228）（1229）（12210）（12211）（12212）（12213）（12214）（12215）（12216）（12217）（12218）（12219）（12220）（12221）（12222）（12223）（12224）（12225）（12226）（12227）（12228）（12229）（12230）（12231）（12232）（12233）（12234）（12235）（12236）（12237）（12238）（12239）（12240）（12241）（12242）（12243）（12244）（12245）（12246）（12247）（12248）（12249）（12250）（12251）（12252）（12253）（12254）（12255）（12256）（12257）（12258）（12259）（12260）（12261）（12262）（12263）（12264）（12265）（12266）（12267）（12268）（12269）（12270）（12271）（12272）（12273）（12274）（12275）（12276）（12277）（12278）（12279）（12280）（12281）（12282）（12283）（12284）（12285）（12286）（12287）（12288）（12289）（12290）（12291）（12292）（12293）（12294）（12295）（12296）（12297）（12298）（12299）（122100）（122101）（122102）（122103）（122104）（122105）（122106）（122107）（122108）（122109）（122110）（122111）（122112）（122113）（122114）（122115）（122116）（122117）（122118）（122119）（122120）（122121）（122122）（122123）（122124）（122125）（122126）（122127）（122128）（122129）（122130）（122131）（122132）（122133）（122134）（122135）（122136）（122137）（122138）（122139）（122140）（122141）（122142）（122143）（122144）（122145）（122146）（122147）（122148）（122149）（122150）（122151）（122152）（122153）（122154）（122155）（122156）（122157）（122158）（122159）（122160）（122161）（122162）（122163）（122164）（122165）（122166）（122167）（122168）（122169）（122170）（122171）（122172）（122173）（122174）（122175）（122176）（122177）（122178）（122179）（122180）（122181）（122182）（122183）（122184）（122185）（122186）（122187）（122188）（122189）（122190）（122191）（122192）（122193）（122194）（122195）（122196）（122197）（122198）（122199）（122200）（122201）（122202）（122203）（122204）（122205）（122206）（122207）（122208）（122209）（122210）（122211）（122212）（122213）（122214）（122215）（122216）（122217）（122218）（122219）（122220）（122221）（122222）（122223）（122224）（122225）（122226）（122227）（122228）（122229）（122230）（122231）（122232）（122233）（122234）（122235）（122236）（122237）（122238）（122239）（122240）（122241）（122242）（122243）（122244）（122245）（122246）（122247）（122248）（122249）（122250）（122251）（122252）（122253）（122254）（122255）（122256）（122257）（122258）（122259）（122260）（122261）（122262）（122263）（122264）（122265）（122266）（122267）（122268）（122269）（122270）（122271）（122272）（122273）（122274）（122275）（122276）（122277）（122278）（122279）（122280）（122281）（122282）（122283）（122284）（122285）（122286）（122287）（122288）（122289）（122290）（122291）（122292）（122293）（122294）（122295）（122296）（122297）（122298）（122299）（122300）（122301）（122302）（122303）（122304）（122305）（122306）（122307）（122308）（122309）（122310）（122311）（122312）（122313）（122314）（122315）（122316）（122317）（122318）（122319）（122320）（122321）（122322）（122323）（122324）（122325）（122326）（122327）（122328）（122329）（122330）（122331）（122332）（122333）（122334）（122335）（122336）（122337）（122338）（122339）（122340）（122341）（122342）（122343）（122344）（122345）（122346）（122347）（122348）（122349）（122350）（122351）（122352）（122353）（122354）（122355）（122356）（122357）（122358）（122359）（122360）（122361）（122362）（122363）（122364）（122365）（122366）（122367）（122368）（122369）（122370）（122371）（122372）（122373）（122374）（122375）（122376）（122377）（122378）（122379）（122380）（122381）（122382）（122383）（122384）（122385）（122386）（122387）（122388）（122389）（122390）（122391）（122392）（122393）（122394）（122395）（122396）（122397）（122398）（122399）（122400）（122401）（122402）（122403）（122404）（122405）（122406）（122407）（122408）（122409）（122410）（122411）（122412）（122413）（122414）（122415）（122416）（122417）（122418）（122419）（122420）（122421）（122422）（122423）（122424）（122425）（122426）（122427）（122428）（122429）（122430）（122431）（122432）（122433）（122434）（122435）（122436）（122437）（122438）（122439）（122440）（122441）（122442）（122443）（122444）（122445）（122446）（122447）（122448）（122449）（122450）（122451）（122452）（122453）（122454）（122455）（122456）（122457）（122458）（122459）（122460）（122461）（122462）（122463）（122464）（122465）（122466）（122467）（122468）（122469）（122470）（122471）（122472）（122473）（122474）（122475）（122476）（122477）（122478）（122479）（122480）（122481）（122482）（122483）（122484）（122485）（122486）（122487）（122488）（122489）（122490）（122491）（122492）（122493）（122494）（122495）（122496）（122497）（122498）（122499）（122500）（122501）（122502）（122503）（122504）（122505）（122506）（122507）（122508）（122509）（122510）（122511）（122512）（122513）（122514）（122515）（122516）（122517）（122518）（122519）（122520）（122521）（122522）（122523）（122524）（122525）（122526）（122527）（122528）（122529）（122530）（122531）（122532）（122533）（122534）（122535）（122536）（122537）（122538）（122539）（122540）（122541）（122542）（122543）（122544）（122545）（122546）（122547）（122548）（122549）（122550）（122551）（122552）（122553）（122554）（122555）（122556）（122557）（122558）（122559）（122560）（122561）（122562）（122563）（122564）（122565）（122566）（122567）（122568）（122569）（122570）（122571）（122572）（122573）（122574）（122575）（122576）（122577）（122578）（122579）（122580）（122581）（122582）（122583）（122584）（122585）（122586）（122587）（122588）（122589）（122590）（122591）（122592）（122593）（122594）（122595）（122596）（122597）（122598）（122599）（122600）（122601）（122602）（122603）（122604）（122605）（122606）（122607）（122608）（122609）（122610）（122611）（122612）（122613）（122614）（122615）（122616）（122617）（122618）（122619）（122620）（122621）（122622）（122623）（122624）（122625）（122626）（122627）（122628）（122629）（122630）（122631）（122632）（122633）（122634）（122635）（122636）（122637）（122638）（122639）（122640）（122641）（122642）（122643）（122644）（122645）（122646）（122647）（122648）（122649）（122650）（122651）（122652）（122653）（122654）（122655）（122656）（122657）（122658）（122659）（122660）（122661）（122662）（122663）（122664）（122665）（122666）（122667）（122668）（122669）（122670）（122671）（122672）（122673）（122674）（122675）（122676）（122677）（122678）（122679）（122680）（122681）（122682）（122683）（122684）（122685）（122686）（122687）（122688）（122689）（122690）（122691）（122692）（122693）（122694）（122695）（122696）（122697）（122698）（122699）（122700）（122701）（122702）（122703）（122704）（122705）（122706）（122707）（122708）（122709）（122710）（122711）（122712）（12

却無。州云。為他有業識在。(復た挙す。僧、趙州に問う、「狗子に還た仏性有りや無や。」)州云く、「有り。」

僧云く、「甚^{ひな}どか者箇の皮袋に撞入すや。」州云く、「他、知りて故に犯すが為めなり。」又た僧問う、「狗子に還た仏性有りや無や。」州云く、「無し。」僧云く、「一切衆生皆な仏性有り、狗子甚としてか却た無き。」

州云く、「他に業識有るが為めなり。」(大正藏四八・一七中)

とある。この話は『永平広録』九、「頌古」七十三則(〔道元禪師全集〕四・二三三頁)や『從容錄』二、十八則(〔大正藏四八・二三八中下〕等にも見られ、道元禪師も『正法眼藏』「仮性」(〔道元禪師全集〕一・三九・四一頁)で丁寧に取り上げて詳述している。ただし、青牛の場合、直後の偈頌の内容、及び後註(17)に挙げる『洞上夜明簾』にある「趙州無」の標題から察するに「無」のみに帰する則を用いたと思われる。

精勵……力を尽くして努めること。

(15) 14 脇、席に著けず……脇を床に付けて眠らないこと、すなわち仏法を求める心が強く、そのため気を抜くことがなかつたということ。『碧巖録』九、八九則評唱に「雲巖与道吾。同參華山。四十年脇不著席。(雲巖と道吾は同じく華山に参じ、四十年、脇席に著けず。)」(大正藏四八・二二三下)とある。

(16) 一旦……ある朝。偈有りて曰く……この偈は『洞上夜明簾』にも、収載されており、

趙州無
栽松青牛(陸奥州頭陀寺)

大地山河隱箇無、山河大地頭斯無。春天花与冬天雪、非有非無亦無。(『曹洞宗全書』「歌頌」、一七下)

と記されている。山河大地という仏性は、眞実たる「無」に隠れたり顕れたりしている。それはまるで春には花が咲き、冬には雪が降るようなもので、有るでもなく無しでもない。しかし無しといつてもそれは眞実たる「無」なのである、といふ程の意か。

〔原文〕

師自是辭去。居無定所。晝常佯狂行乞。霄宿館舍之下。或混跡於漁樵。年後入奧州小手郡之山中。結茆而居。澗飲木食。纔接氣。常往石上宴坐。又登山植松。自號栽松道者。如是者凡二十年。州之太守某氏。遊獵入山。見師風爲建院宇居之。且請寄附田莊而資常住。師固辭不受。但要乞食於郡縣。以充僧供。太守聞之增信崇焉。

〔訓読〕

師、是れ自り辞し去りて、居に定所無し。昼は常に佯狂とよちきよちとして行乞し、霄は館舎の下に宿す。或いは跡を漁樵に混じて歴年。後、奥州小手郡(おほで)の山中に入りて、茆を結んで居す。澗飲木食して、纔かに氣を接ぐ。常に石上に往いて宴坐し、茆を結んで居す。又た山に登り松を植え、自ら栽松道者と号す。是の如くすること凡そ二十年、州の太守某氏、遊獵して山に入り、師の風を見、為めに院宇を建てて之れに居せしむ。且つ田莊を寄附して常住を資けんと請う。師、固辭して受けず、但だ食を郡(さへ)に乞いて、以て僧供に充てんと要す。太守之れを聞きて増す信崇す。

〔註記〕

(18) 佯狂……愚者のふりを装うこと。

(19) 漁樵……漁業に従事する者や林業に従事する者のこと、當時は差別を受けた民衆である。ここでは青牛がそのような

民衆に紛れて生活を送っていた様を言う。前注前註¹⁸と共に、悟後の修行としてこのような行動が流行していた。なお、本文には「撫」とあるも、文意より「樵」に改める。「撫」は、えらぶ、ぬぐう、おす。

(20) 小手郡……現在の福島県川俣町・飯野町・月館町などを含めた地域は古く小手郡(郷)と呼ばれた。

(21) 茆を結んで……粗末な草庵を作ること。
(22) 澗飲木食……谷川の水を飲み、木の実を食べて命を繋ぐこと。『禪林宝訓』三に「澗飲木食。而終其身哉(澗飲木食して其の身を終えるかな)」(大正藏四八・一〇三〇上)との用例がある。

(23) 宴坐……燕坐とも。「宴」も「燕」も「安」の意で、坐禪のこと。

(24) 栽松道者……『林間錄』上(正統藏一四八・五九〇下)、五九一(上)や『正法眼藏』『仏性』(道元禪師全集)一・一九頁等で見られる伝記に依れば、禪宗五祖大滿弘忍(六〇一・六七四)が前世において松を植えていたが、ある時四祖道信(五八〇・六五二)と出会つたので、教えを請うたところ、高齢を理由に断られた。そこで一人の女性に托胎し生まれ変わり、七歳にして再び道信に見えたという。従つて栽松道者とは弘忍の前世の名、ないし弘忍の異名とされる。青牛が山に登つて松を植え、栽松道者と号したのは、この話を踏まえてのことであろう。また、『臨濟錄』には

師栽松次。黃蘖問。深山裏栽許多作什麼。師云。一与山門作境致。二与後人作標榜。道了将鑊頭打地三下。黃蘖云。雖然如是。子已喫吾三十棒了也。師又以鑊頭打地三下。作噓噓声。黃蘖云。吾宗到汝大興於世。(師、松を栽うる次で、黄蘖、問う、深山裏に許多を栽えて什麼を

か作さん。師、云く、一には山門の与に境致と作し、二には後人の与に標榜と作す。道いたりて鑑頭を將ちて地を打つこと三下す。黄蘖云く、是の如くと雖然ども、子、已に吾が三十棒を喫し了れり。師、又た鑑頭を以て地を打つこと三下し、嘘嘘の声を作す。黄蘖云く、吾が宗、汝に到りて大いに世に興らん。」(大正四七・五〇五上)とあり、禪者が松を植えることにより、仏法が世に広がるとの意義が説かれている。

(25) 州の太守某氏……時の奥州太守が具体的に誰であるかは不明であるが、奥州太守が奥州探題のことだとすれば、斯波

(大崎)氏であったものと思われる。ただし伊達成宗(一四五)一四八七?)は大崎氏より妻を迎へ、奥州探題に就任しており、頭陀寺の名目上の開基も伊達稙宗であることよりすれば、あるいは伊達氏の系列の人物を指すか。だとすれば年代的には瑞竜院の開基でもある伊達持宗(一三九三)一四六九)であつた可能性もあるう。

院宇……垣根、囲いのある家屋のこと。

(26) 常住……ここでは寺院の運営を指す。

(27) 郡県……ここでは、その地方、程度の意であろう。

(28) 僧供……僧への供物。恐らく青牛は、地元の人々から得た施物を他の寺院の僧侶達への供養にあてたのである。

(原文)

師常畜一頭牯牛。負之草籠。而放村落。民家漸知。咸以米投籠中。籠滿則牛自還焉。由是四衆臻萃。遂成叢席。仍名寺號頭陀。永正三年六月二十六日唱滅。

〔訓読〕

師、常に一頭の牯牛を畜³⁰う。之れに草籠を負わせて村落に放つ。民家、漸く知りて咸^みな米を以て籠中に投³¹す。籠、満るときは則ち牛、自ら還る。是れに由り四衆臻^{いた}り萃^{あつま}りて、遂に叢席と成す。仍りて寺に名づけて頭陀³²と号す。永正三年六月二十六日、滅を唱う。

〔註記〕

(30) 牯牛……牝牛。

(31) 四衆……仏教を信奉する人々を、比丘(男性出家者)・比丘尼(女性出家者)・優婆塞(男性在家信者)・優婆夷(女性在家信者)の四に分けた呼称。これに沙弥(二十歳前の男性出家者見習い)・沙弥尼(十八歳前の女性出家者見習い)・式叉摩那(十八から二十歳の女性出家者見習い)の三を加えて七衆とする場合もあるが、曹洞宗では原則として四衆に分けるのみである。

(32) 頭陀……僧侶が衣食住において厳格かつ簡素な生活を送ること。青牛の無欲にして簡素な禪僧生活に導かれて出来た寺であるから、頭陀寺といいう名を冠したということであろう。滅を唱う……滅度を唱える、すなわち亡くなること。この表現は中国の禪籍にはあまり例を見ないが、日本の禪籍にはしばしば散見される。

19. 松堂高盛禪師（曹全「史傳」三七三頁上段（下段））

六十一。以全身塔于本寺。有語錄行於叢林矣。

〔原文〕

圓通古山崇永禪師法嗣

遠州圓通松堂高盛禪師。州之寺田鄉人也。出藤氏。七歲隨祖父道印。登日高山。拜大輝和尚。而師事之。幼而聰敏。記誦逸群。十五鑑聚圓具。隨輝上足古山永公。咨參數年。有所默契。一日辭山南詢。或入禪林。或遊講肆。已飽省古山於圓通。山見師來便問。三日不相見。莫作舊時看。汝久遊他方。此日偶歸。即今相見事作麼生。師曰。如兩鏡相照於中無影像。山曰。正當恁麼時如何。師進前叉手立。山曰。如是如是。遂付信衣。

師又侍七年。及山示寂。衆請嗣席。師領之數白。鶯遷大洞佛陀總持。不振玄綱。

亡何復還圓通。追慕先人遺蹟。耕雲種月起清白。有偈曰。高山之下遠江陽。紫翠相圍宜寂場。一自乃翁挂金錫。三禪天樂小蘿房。又。朝汲清冷無底桶。夕燒榦柵死灰爐。大千世界蒲團上。古往今來過隙駒。臘八示衆。運籌帷幄鎖重門。幾度臨危高節存。活捉無明山上賊。一毛頭上定乾坤。四來服高標。遠近等崇焉。

永正二年乙丑二月十一日辰時。書偈曰。七十有五歲。青天起忽雷。片雲端的卷。露柱笑咍咍。投筆而逝。俗壽如偈。僧臘

〔訓読〕

円通古山崇永禪師法嗣

遠州円通、松堂高盛禪師、州の寺田の郷の人なり、藤氏より出づ。七歳にして祖父道印に随つて日高山に登り、大輝和尚を拝してこれに師とし事う。幼にして聰敏、記誦逸群。十五にして鑑髮円具⁽⁶⁾。輝の上足、古山永公に随つて咨參數年、默契するところあり。一日、山を辭して南詢す。或いは禪林に入り、或いは講肆に遊ぶ⁽⁸⁾。已に飽いて古山を円通に省す。山、師の来るを見て便ち問う、「三日相見せざれば、旧時の看を作すことなけれ。汝、久しう他方に遊んで、此の日偶ま帰る。即今相見の事、作麼生。」師曰く、「正当恁麼の時如何。」師、進て影像なきが如し。」山曰く、「正当恁麼の時如何。」師、進前叉手して立つ。山曰く、「如是如是。」遂に信衣を付す。

師、又た侍すること七年、山の示寂するに及んで、衆、請して席を嗣がしむ。師、これを領すること數白、大洞・仏陀・總持に鶯遷して、丕⁽⁹⁾いに玄綱を振るう。

何く亡くして復た円通に還り、先人の遺蹟を追慕して、雲に耕し月に種え清白を起こす。偈ありて曰く、「高山の下、遠江の陽⁽¹⁰⁾、紫翠相围んで寂場に宜し。」一たび乃翁の金錫を挂けてより、三禪天の樂、小蘿房⁽¹¹⁾。又た、「朝に清冷を汲む無

底の桶、夕べに梧桐を焼く死灰の炉。大千世界蒲団上、古往今來、隙を過ぐる駒。⁽²⁾ 脇八⁽²²⁾ の示衆に、「籌を帷帳に運らして軍門を鎖す、幾度か危に臨んで高節存す。無明山上の賊を活捉して、一毛頭上、乾坤を定む。」四來高標に服し、遠近等しく崇む。

永正二年乙丑二月十一日、辰の時、偈を書して曰く、「七十五歳、青天、忽雷を起こす、片雲、端的卷く。露柱笑い咍。」筆を投じて逝く。俗寿、偈の如く、僧臘六十一。全身を以て本寺に塔す。語録あり、叢林に行わる。

〔註記〕

(1) 円通……遠州高台山円通院のこと。但し現在は廃寺。永享九年（一四三七）七月、如仲天闇の法嗣大輝靈曜が慶本なる僧の勧めにより、遠州佐野郡田原莊寺田郷に結んだ庵から發展した。大輝は本師如仲を開山とし自ら「世となり高台山円通院」とする。『円通松堂禪師語録』、「灰燼後遇半家成」（曹洞宗全書「語録」四一五頁）によれば、四世松堂高盛代の文明八年の春に一度焼失し、復興されたことが知られる。また廣瀬良弘氏は『禪宗地方展開史の研究』（三七四頁）において、円通院は、在地領主原氏の一族である寺田氏が大輝に帰依し檀越になつて、松堂がこの寺田氏の出身であり一族の帰依する郷内寺院の住持となつたことを指摘されている。

(2) 古山崇永……古山崇永（一四〇一～一四六七）の伝は、堂高盛撰『円通松堂禪師語録』卷第一「十境并序」、『続日洞上聯燈錄』卷五に見えて

洞上諸祖伝 卷第二、「日本洞上聯燈錄」卷六に見える。これらによれば、古山は応永八年（一四〇一）遠州周智郡飯田莊に生まれ、七歳の時、如仲天闇について出家して童行となり、如仲の法嗣大輝靈曜について参学した。嘉吉二年（一四三二）、四十二歳の時に大悟して大輝の印可を受けた。文安三年（一四四六）に大輝が示寂するに及んで高台山円通院三世となり、応仁元年（一四六七）七月三日に示寂。この間、円通院を出ることはなかつたという。

(3) 松堂高盛禪師、州の寺田の郷……「寺田の郷」は高台山円通院の所在地でもある遠州佐野郡原田莊寺田郷のこと。松堂高盛（一四三一～一五〇五）は在地領主原氏の一族である寺田氏の出身であるとされる。前註1参照。

(4) 七歳にして祖父道印に随つて……松堂七歳は永享九年（一四三七年）にあたり、円通院開創の年。「祖父道印」については未詳。「日高山」は円通院を指すと思われるが、松堂撰「十境并序」（前註2参照）に「故俗喚曰高山。或喚曰霧山。又谿上梧桐多。故曰桐山」（故に俗に喚んで高山と曰い、或いは喚んで霧山と曰い、又た溪上に梧桐多きが故に桐山と曰う）とあることから、「高山」の誤りかと思われる。また「十境并序」ではこの時「驅鳥」（沙弥）となつたことを述べている。正式に比丘となつたのは十五歳の時である。後註6参照。

(5) 大輝和尚……大輝靈曜（一三八三～一四四六）のこと。大輝の伝は松堂高盛撰『円通松堂禪師語録』卷第一「十境并序」、『続日洞上諸祖伝』卷第一、「日本洞上聯燈錄」卷五に見える。これらによれば、大輝は永徳三年（南朝弘和三年／一二八三年）に尾州高柳に生れた。俗姓は平氏といふ。七歳の時、清拙禪師について出家。初め教家の講肆に学んだが、十

九歳の時別伝の宗旨を慕つて如仲天闇に参じた。応永三三年（一四二六）頃、大洞院に住しているから、恐らくこの頃、如仲に嗣法したものと思われる。大洞院には永享二年（一四三〇）頃までの五年間住し、加賀靈鷲山仏陀寺に転住している。この間、如仲の指示によつて川僧慧済が参じた。永享六年（一四三四）三月九日には總持寺に入院、後に遠州に帰り大通寺に住した。永享九年（一四三七）に高台山円通院を開創したことは前註¹参照。

（6）十五にして……松堂の十五歳は、文安二年（一四五五）にある。これは祖父道印の遺言によるという（「十境并序」）。【鑑髮】は髪を剃ること、「円具」は完全に戒を具することである。これは祖父道印の遺言によるという（「十境并序」）。

（7）輝の上足、古山永……大輝の高弟古山崇永の意。大輝については前註⁵、古山については前註²参照。松堂の「十境并序」によれば、文安三年（一四四六）に大輝が示寂したのにもない、古山に参じたといふ。但し資參数年して黙契したことについては述べられていない。

（8）一日、山を辞して……松堂の「十境并序」によれば、享徳元年（一四五二）二十二歳のおり、古山のもと離れ、足利学校に行き、二十二歳。古山崇永のもとを離れ足利学校に行き、儒書や詩を学び、仏典祖録を拜誦したといふ。

（9）（10）既に飽いて……長禄二年（一四五八）夏頃、足利学校を離れ円通院に帰り、再び古山崇永に参じたといふ（「十境并序」）。山、師の来るを見て……以下の問答は師資證契の機縁。古山と資松堂の相見は両鏡の相照らすことなくあり餘物を交

えない」と述べ、智境、能所の対立を超えたその境界を師の前に進み出て叉手して立つことで具体的に示した。「信衣」は、嗣法の証として師から弟子へ授けられる僧伽梨衣。但し「十境并序」の伝えるところに比すれば、この問答は大いに改変、省略がなされていることが知られる。なお、松堂が古山の印證を受けたのは、「十境并序」によれば長禄四年（一四六〇）三十歳の時であるといふ。

（11）大洞・仏陀・總持……「大洞」は大洞院。本稿「賢窓常俊禪師章」参照。「仏陀」は加賀大鷲山仏陀寺のこと。峨山二十五哲のひとり太源宗真和尚（？）（一四八七）が、その晩年に加賀に開創した寺院。丹波永沢寺（通幻下）・越前祥園寺（無端下）・越中立川寺（大徹下）・能登護聖寺（実峰下）とともに總持寺直末として特別な地位を占めたといふ。また現在は廃寺となつてゐるが、少なくとも文禄四年（一五九五）まではその存在が確認できる（栗山泰音「嶽山史論」「廢絶せる仏陀寺と聖興寺」）。「總持」は能登總持寺。但し、松堂の總持寺への晋住時期は未詳。「鷲遷」は、昇進や栄転を鷲が深い谷から高い木に移ること。ここでは松堂が本山總持寺を含め次々と転住したことを讃えた表現。

（12）何く亡くして復た円通に還り……円通院における松堂の暮らしぶりを松堂は「十境并序」に「自爾忝主函丈。自肩斧鑊。致土木功。或剪茅茨。蓋破屋之漏滴。或披荆棘。除石徑之遮欄。栽松杉於春林。插梅竹於岩下。掬礪水而爲飲。掃綠苔而作筵。主客對談。白雲青嶂。是非榮辱。風過樹頭。可憐塵路奔馳人。不知六六三十六。」と表現している。また、文明八年（一四七六）には火災により焼失するなどの波瀾もあつた（前註¹参照）。さらに、自身の一族寺田氏が支える円通院における松堂の、地域に密着した活動については、廣瀬良弘氏

が『禪宗地方展開史の研究』第二章第八節「曹洞禪僧の地方活動—遠江国における松堂高盛の活動を中心として—」について詳細な分析を加えておられる。

(13) 僥ありて曰く……面山瑞方編『洞上夜明簾』には松堂の偈を六首収めており、『聯燈錄』所収の四首はすべて含まれている(『曹全』「歌頌」二十八頁)。『夜明簾』は『聯燈錄』所

取の四首のうち最初の二首を「山居二首」とし、三首目を「仏成道」、四首目を「遺偈」とする。

(14) 高山の下、遠江の陽・富士山麓にして駿河湾の北、円通院の所在地をかく表現する。「陽」は川や湖等の北側をいう。

(15) 紫翠相間んで寂場に宜し……「紫翠」は紫とみどりで、山色の美しいことをいう。「寂場」は寂滅道場(仏が寂靜なる涅槃を成就する道場)のこと。例えば『法華玄義』の「一期化導」という文を託して『法華玄義釋籤』一上(大正三三、八一七中)に「始自寂場終乎鶴樹故曰一期、誘物入實故云化導(始め寂場より鶴樹に終わる故に一期と曰う、物を誘うて実に入らしむ故に化導と云う)」とある。ここでは圓通院が美しい山にかこまれ道を修するにふさわしいことをかのように述べる。

(16) 一たび乃翁の……「乃翁」は一般にはなんじの父の意で、父の子に対する自称、あるいは他者の父に対する称として用いられる。ただし、例えは『大智禪師偈頌』「覽永平和尚之坐禪箴」に「乃翁毒手許誰知(乃翁の毒手、誰か知ることを許さん)」とあって道元禪師のことを指しており、瞎道本光(一七一〇~一七七三)は『祇陀開山大智禪師偈頌』著落在參卷上で「乃又汝爾之稱、猶言祖翁(乃是又汝爾之稱、猶お祖翁と言わんがごとし)」と注しており、みずから承ける法系上の祖師を指す用例がある。ここでは松堂の本師古

山崇永を指す。「金錫」は錫杖(僧侶のもつ杖)の美称でここでは古山より相承した仏法を象徴させていよう。「乃翁の金錫を掛け」ると、松堂が圓通院に留まつたことを言い、兼ねて古山に嗣いだ法を圓通院において修したもつていること。

(17) 三禪天の樂……「三禪天」は四禪中の第三禪を証した境地で、二禪で得られる喜を離れ、まことの樂を得るという。例えは『仏說大集法門經』上には「不貪於喜、住於捨行、身得輕安妙樂、此名第三離喜妙樂定(喜を貪らず、捨行に住し、身に輕安妙樂を得、これを第三離喜妙樂定と名づく)」(大正一、二二八下)とある。禪定を修することによつて得られる樂を表現する際にしばしば用いられる表現。「小蘿房」はつたのからまる小さな部屋の意で、圓通院を指す。例えは隱遁者(ひきとんしゃ)の住まいを蘿門(つたのからまる門)と言うのと同様の表現。この句では、松堂が紅塵を離れて圓通院に隠棲し坐禪の法樂を受用していることをいう。

(18) 朝に清冷を……「江湖風月集」「惠山煎茶」に「瓦瓶破曉汲清冷、石鼎移來壞砌烹(瓦瓶、破曉に清冷を汲んで、石鼎移し來たつて壊砌に烹る)」とあるを踏まえる表現で、修行の生活を言う。但し、清き水を汲むものが「無底の桶」とされており、無所得の修行を表現していよう。

(19) 夕べに梧桐を……「梧桐」は短くまつたたきぎ、ほど。「死灰」は燃え残りなくすべて燃え尽きて冷え切った灰。例えは『圓悟錄』卷十四に「直下如枯木死灰、情盡見除到淨裸裸亦灑灑處(直下に枯木死灰の如く、情尽き見除き淨裸裸亦灑灑の處に到る)」とある。なおこの句は、北禪智賢(生没年未詳)の除夜小參を踏まえる表現で、松堂の圓通院におけるみずから法樂を受用するさまを言うか。例えは『五灯会元』十

五「北禪智賢章」（中華書局本第三冊、九九八～九頁）には以下のようにある。

歳夜小參曰、年窮歲盡、無可與諸人分歲。老僧景一頭露地白牛、炊黍米飯、煮野菜羹、燒榦榦火、大家喫了、唱村田樂、何故、免見倚他門戸傍他牆、剛被時人喚作郎。便下座歸方丈。

（歳夜小參に曰く、年窮歲尽、諸人と分歲すべきなし。老僧、一頭の露地の白牛を烹て、黍米飯を炊き、野菜羹を煮、榦榦火を焼き、大家喫し了らば、村田樂を唱わん。何の故ぞ他の門戸に倚り他の牆に傍い、剛に時人に喚んで郎と作さることの見わるるを免れん。便ち下座して方丈に帰る）

蒲團上……坐蒲上のこと、すなわち坐禅を言う。隙を過ぐる駒……馬が、戸のすきまなどをあつといふ間に通り過ぎるほど短い時間。時間の経過が速やかであること、人生が短いことをいう慣用的な表現。例えば『莊子』「外篇」

「知北遊篇第二十二」に「人生天地之間、若白駒之過隙、忽然而已」（人の天地の間に生くるは、白駒の郤（隙）を過ぐるが若く、忽然たるもの）（岩波文庫『莊子』第三冊、一五九頁）とある。

（22）臘八……臘月（十二月）八日、釈尊成道の日。

（23）籠を帷帳に……漢の高祖の語。直接には出陣せず、本陣の内にあって作戦を立てるの意。以下釈尊の成道を頌する。

（24）無明山上の……煩惱という賊を生け捕りにする。『碧巖錄』卷一に附刻された「夾山無碍禪師降魔表」に「一志向前、念念不退、倏忽而魔軍大敗、六賊全輸、殺戮無邊、掃除湯盡、生擒妄想、活捉無明、領向涅槃場中、以慧劍斬爲二段（一志向前、念念退かず。倏忽に魔軍大敗し、六賊全く輸す。殺戮

無辺、掃除湯尽し、妄想を生擒し、無明を活捉し、涅槃場中に領して慧劍をもつて斬つて三段となす）」（大正四七、五一上）とある降魔のさまを用いて、釈尊の成道を讃えるものか。

（25）

「毛頭上……『人天眼目』卷一「古宿十智同真問答」に「百草頭邊任遊戯、一毛頭上定乾坤（百草頭邊、遊戯に任せ、一毛頭上に乾坤を定む）」（大正四八、三〇五上）とあるに依る。「明星出現の時、我と大地有情と同時に成道す」という釈尊の成道を、一茎の草のところに天地乾坤の秩序を安定させると表現したものか。

（26）

水正二年乙丑二月十一日……永正二年は西暦一五〇五年にある。世寿は「偈の如く」というから七十五歳であり、これから生年等が算定できる。ただし、僧臘は入衆以後、一夏を過ごした回数で数えるという慣例にしたがうなら、出家が十四歳の時となり、「十五にして鑑髮円具」という記述と齟齬する。

（27）

語錄あり……『円通松堂禪師語錄』五巻は、松堂の法嗣欣堂宗喜、全聖宗盛が住した長福寺および西福寺所蔵の写本にもとづき校訂され「曹洞宗全書」「語錄一」に収録されていく。「叢林に行わる」というが、これ以前の刊行は確認されておらず、伝写され流布した。

卷第七所収諸伝訓註（その三）終